当科における耳鳴症例の検討

本田 学・大河内 幸男・大谷 巖

A Clinical Study of Patients with Tinnitus

Manabu Honda, Yukio Ohkouchi and Iwao Ohtani

(Fukushima Medical College)

Patients with tinnitus were analyzed by the standard test of tinnitus. Most of the patients were in their 40's and came to our clinic within 6 months after the onset of the disease. Many of the patients reported nearin a high-pitched tone. Multiple kinds of tinnitus were found 38% (49/155) of the patients.

Key words: tinnitus, standard test, clinical study

はじめに

耳鳴患者の訴えは種々様々で、それらを的確に把握するためには、耳鳴検査が必要である。しかし各々の施設では独自の耳鳴検査を行っていたため、施設間の比較検討が難しかった。そのため耳鳴研究会では統一した検査法として、標準耳鳴検査法^{1984¹⁾}を決め、耳鳴の一般的な検索の方法について示した。今回この標準耳鳴検査法^{1984年}にもとづき、当科における耳鳴症例について検討を行ってみたので報告する。

対象及び方法

対象は、昭和58年から昭和60年までに耳鳴検査を行った、男性79人、女性76人、計155人である。なお伝音難聴の認められる症例は、今回の検討から除外した。通常の間診、聴力検査などを行いながら、耳鳴の間診表を用い、耳鳴の訴えや耳鳴の性状及び耳鳴の表現について記載した。耳鳴の周波数の検査については、pitch match test にて行った。なお標準耳鳴

検査を行う前の症例については、標準耳鳴検査にもとづき処理を行った。

結 果

年齢構成は(図1) 6歳から86歳まで広く分布しているが、50~60歳台に多く、平均52歳であった。このうち無難聴性耳鳴は20~30歳台に多くなっていた。耳鳴が始まってから初診までの期間は(表1)、1カ月以内が43例、1~6カ月が42例、6カ月~1年が19例、1~5年が32例、5年以上が19例であった。

耳鳴周波数については(図2)、無難聴性耳鳴例(正常)は、高音域と低音域に耳鳴周波数が2つに分かれてみられた。c⁵ dip 症例(c⁵ dip)は、4~8 kHzにみられ、特に6~8 kHzとc⁵よりやや高音域にずれる例が多くみられた。突発難聴症例(突発難聴)は、高音域と低音域に分散してみられた。その他の感音難聴症例(その他)は、一定の傾向は認められなかったが、高音部に耳鳴周波数が多くなってい

た。

耳鳴側及び耳鳴の種類については(表2), 両側性耳鳴と頭鳴を訴える例では, 48例中24例, 50%に2種以上の耳鳴があると答えており, 一側性耳鳴においても, 107例中35例, 33%に2種以上の耳鳴があると答えていた。なお突発難聴や c^5 dip では, 多くの例で, 耳鳴は1種類と答えていた。

耳鳴の表現については(表3), キーンが最も多く, 78例(50.3%)と半数を占めていた。次いでジーが51例(32.9%)であり, あとは少なくなり, シーン16例(10.3%), シー15例

(9.7%), ミーン15例(9.7%), グーン11例(7.1%), ゴウゴウ10例(6.5%)の順でみられた。耳鳴の表現と耳鳴周波数との関係については, はっきりした傾向が認められなかった。

耳鳴の大きさ, 持続および気になりかたについては(表4), 耳鳴の大きさ及び持続のところでは, 4点と2点の所に訴えが集中していた。耳鳴の大きさについては, 正常に比べ, 感音難聴のみられる症例に, 大きく感ずる例が, 多くなっていた。耳鳴の持続については, 特に各々に差は認められなかった。耳鳴の気になりかたについては, 感音難聴の症例で, ひどく感

図1 年齢, 性別の構成

図2 耳鳴周波数の分布

ずる例が多くなっていた。

考 察

Fowler³⁾ は中年以降には85%耳鳴があるとしており、耳鳴は、耳科的疾患の中でも最もポピュラーな疾患の1つである。しかし自覚的な訴えが主となるため、診断や治療に苦慮する場合も多い。そのため各々の施設では、独自の耳鳴検査法を作り、検査をしていたが、内容の違いから、他の施設との比較が難しかった。そこ

表1 受診までの期間

期 間	正常	c ⁵ dip	突発 難聴	その他	計
一ヶ月以内	9	1	7	26	43
～6ヶ月	8	0	2	32	42
～1 年	3	3	0	13	19
～5 年	5	4	1	22	32
5 年以上	1	0	0	18	19
計	26	8	10	111	155

表2 耳鳴側と耳鳴の種類

耳鳴の種類	一種	二種	三種 以上	計
一側性耳鳴	72	28	7	107
両側性耳鳴	14	13	3	30
頭 鳴	10	2	6	18
計	96	43	16	155

表3 耳鳴の表現（上位7例の表現例）

耳鳴の表現	正常	c ⁵ dip	突発 難聴	その他	計
キーン	13	5	5	55	78
ジー	11	1	0	39	51
シーン	2	1	0	13	16
シー	4	2	2	7	15
ミーン	2	0	0	13	15
ゲー	3	1	1	3	11
ゴウゴウ	2	0	0	8	10

で、耳鳴研究会では、標準的な検査法の一つとして、標準耳鳴検査法1984を決めた。今回、この標準耳鳴検査法にもとづき、われわれの耳鳴症例について検討を加えてみた。

年齢構成については、50歳台に多くっており、他の報告⁴⁾⁵⁾と同様であり、性別についても、男性79例（51%）、女性76例（49%）と他の報告⁶⁾⁷⁾と同様に性差は認められなかった。受診までの期間については、突発難聴のように、急に発症した耳鳴は、早期に来科しているが、他の症例も半数以上は6カ月以内に来科していた。しかし、その他の感音難聴群では、5年以上と長期の例が18例（16%）と比較的多くなっていた。

耳鳴周波数については、無難聴性耳鳴は、他の報告⁴⁾⁵⁾と同様に高音域に多く見られたが、朝隈ら⁸⁾の報告にあるように、低音域にも認められ、耳鳴の性質に差がある可能性を示している。c⁵ dip 例は、障害周波数と考えられる4 kHz よりやや高音域の6～8 kHz にずれる例

表4 耳鳴の大きさ、持続、気になり方の程度

耳鳴の程度	正常	c ⁵ dip	突発 難聴	その他	計
大 4 大	6	5	4	40	55
3 ↑	1	0	0	6	7
き 2	18	3	6	64	91
1 ↓	1	0	0	1	2
さ 0 小	0	0	0	0	0
持 4 長	16	6	8	66	96
3 ↑	1	0	1	3	5
2	9	2	1	39	51
1 ↓	0	0	0	2	2
続 0 短	0	0	0	1	1
気 4 重	3	2	2	30	37
に 3 ↑	9	2	3	39	53
な 2	12	3	4	35	54
り 1 ↓	1	1	1	7	10
方 0 軽	1	0	0	0	1

が多くみられた。これは dip が正確には c⁵ の位置よりずれているとか、耳鳴は傷害部よりややずれた位置に出現するなどのことが考えられ、なお検討が必要である。突発難聴症は、聴力障害の型及び程度に差があるためか、高音域と低音域に分散してみられた。まだ症例が少ないため、今後症例を増やし、検討する必要がある。その他の感音難聴症例は、様々な難聴像を示すため、一定の傾向は認められなかったが、老人性難聴のような、高音障害型の症例が多いためか、高音部に耳鳴周波数が多くなっていた。

耳鳴側及び耳鳴の種類については、両側性耳鳴や頭鳴を訴える例では、50%に2種以上の耳鳴があり、一側性耳鳴においても、33%に2種以上の耳鳴が有り、全体では38%に複数の耳鳴を訴えていた。これは、耳鳴検査において、常に複数の耳鳴を考慮に入れ、どの耳鳴を訴えているのかを注意しながら、検査を進めなければならない。

耳鳴の表現については、キーンが最も多く、次いでジーであり、あとは少なくなっていた。キーン、ジーなどの一般的な表現に偏り、耳鳴検査の表現例として示されている他の多くは当てはまらないことが多く、表現例については、まだ、検討の余地があると考えられる。耳鳴の表現と耳鳴周波数との関係については、はっきりした傾向は認められなかった。

耳鳴の大きさ、持続については、特に疾患別に差は認められなかった。しかしその程度の点数では、4点と2点の所に訴えが集中していた。これは、耳鳴の気になりかたの項目に比べ、前の2つ項目はやや具体性に欠けるため、記載に偏りが出たと考えられる。耳鳴の大きさについては、感音難聴のある例が、大きく感ずる場合が多い結果であった。

ま と め

耳鳴患者 155 例について標準耳鳴検査¹⁹⁸⁴にもとづき、検討を行ってみたので報告した。

1. 耳鳴患者は、50歳代に多く、性差はなかった。受診までの期間は、6 カ月以内が多かった。
2. 耳鳴の周波数については、高音域に多くみられた。
3. 耳鳴側及び耳鳴の種類については、38% (49/155) の例で複数の耳鳴を訴えていた。
4. 耳鳴の表現については、一般的な表現に偏り、はっきりした側向は認められなかった。
5. 耳鳴の持続については、特に疾患別に差は認められなかった。耳鳴の大きさ、気になりかたについては、感音難聴例で、ひどく感ずる例が多かった。

参考文献

- 1) 耳鳴研究会：標準耳鳴検査法¹⁹⁸⁴。耳鳴研究会，1984。
- 2) 本田 学，他：当科における耳鳴の調査。Audiology Japan 26：575～576，1983。
- 3) Fowler EP：Nonvibratory tinnitus：Factors underlying subaudible and audible irritations. Arch Otolaryng 47：29～36，1948。
- 4) 大内利明，他：バランス法による耳鳴の評価。Audiology Japan 26：105～111，1983。
- 5) 矢岡崎恵美子，他：当病院における耳鳴患者の実態。Audiology Japan 26：138～141，1983。
- 6) 鳥山 稔，他：耳鳴の臨床的研究。Audiology Japan 27：469～470，1984。
- 7) 藤田和寿，他：オーディオグラムによる耳鳴患者の検討。Audiology Japan 28：567～568，1985。
- 8) 朝隈慎一郎，他：無難聴性耳鳴と無響室性耳鳴について。Audiology Japan 26：581～582，1983。

別刷請求先：本田 学
〒960 福島市杉妻町 4-45
福島県立医科大学耳鼻咽喉科学教室